

アトモスフィア

シニア生化学会員の留学記

石 村 ^{ゆずる} 巽 *

この4年ほどを米国テキサス州のサン・アントニオ市で過ごした。旧友の研究室で働いた訳だが、定年後に行っても教えるより学ぶことの方が多く、やはり留学と呼ぶのがふさわしい日々だった。以下はその間の経験に基づく感想である。

まず、サン・アントニオ市が米国第9位の人口を持つ都会だといったら、皆さん意外に思われるのではないか。テキサスは日本の2倍強の面積をもつ大州だが、東部や西部諸州に比べてあまりよく知られていない。森と緑の沃野に富むのに砂漠ばかりと思っている人もある。経済力は巨大で、仮に州のGDPを計算するとカナダ一国に匹敵するらしい。学問的にもヒューストンやダラス、そしてサン・アントニオの水準は高い。ブッシュ大統領の地盤とあれば当分の間、日本での人気は高くないだろう。しかし、独立独歩の気概をはじめ、学ぶべきことは沢山ある。

私が初めて米国に留学したのはもう40年に近い昔である。ダラスとニューヨークを経験した。当時と比べ最も著しい違いはアジア系研究者の進出とそのパワーである。主に中国とインド系の俊秀達が、米国そして世界の生命科学の担い手となっている。訪米のたびに感じておいたし、学術誌の著者名リストを見れば判ることだが、その渦中に身を置くと迫力があつた。日本人は数が少ないせいか目立たない。学問にかぎることではないが、アジア系がスーパーパワーを握る50年後の世界が暇に浮ぶ。日本もアジア諸国との交流を益々大切にしたい。

私を置いてくれたDr. Bettie Sue Mastersはドイツ系の明るいレディだが、私の滞在中に米国生化学・分子生物学会(ASBMB)のプレジデントをつとめていた。ところが、その前任者も後任者も女性であった。つまり、ASBMBのトップは三代(6年間)つづけて女性である。そのBettie Sueが、教室の廊下で“Hi, you guys”と二人のレディに呼びかけたのには仰天した。私の到着翌日のことであつた。注意していると、牧師さんですら女性にガイと言う。僕の旧知識だとナイス・ガイとは「男らしい男」のことで女性に使う言葉ではなかった。物議りアメリカ人によると、社会全体の中性化の表れだという。ホームレスでさえ女性がふえている。しかし、日本と同様に平均給与には性差が大きく、米国の女性達は怒り続けている。日本の女性も頑張れ!

年齢による差別は日本より少ない。通常書類には年齢欄がないし、定年もない。最も若い友人は16歳の実習生ロレーンだったが、彼女はBettie Sueにも私にも対等な人間として話しかけてくる。年寄りを胡散くさい目でみないから気持ちがいい。気が付くと、彼女だけでなくグループの全員が互いに同じ高さの目線で話合っている。勿論、例外はあるし、研究室によるのかもしれない。しかし、頭をぺこぺこ下げないこの人間関係は出来るだけ輸入したい。さらに、研究室での笑いとユーモアも輸入したかった。日本では一般に笑いが少ない。研究室だけでなく、講演にも会議にも。

紙面との関係で結論を急ぐ。私の居たテキサス大のサン・アントニオ・ヘルスサイエンスセンターには生化学教室だけで14名の正教授が居た。日本のような教授会がないのに加え多数で業務を分担するので、彼らは自分の研究・教育に集中できる。Chairmanでさえ、現役時代の私より研究時間に恵まれていた。皆さん、日本の助手を廃止して、教授、または独立した研究者の席を増やしませんか。また、教授会による大学・学部の運営はやめて、専門家に任せましょう。ふつうの教授に経営手腕などのある筈がない。そして、研究費の審査にはNIHなみの手間と時間をかけるべきです。審査員には定年後の優秀な教授達が山ほどいます。誓って、彼らは公正だしお金も請求しないことを保障する。

*慶應義塾大学名誉教授、本会名誉会員